

令和元年6月25日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26370320

研究課題名（和文）アジア系アメリカ人作家の戦争表象研究におけるトラウマ理論の有効性について

研究課題名（英文）The Effectuality of Trauma Theories to Analyze Asian American Writing on Wars

研究代表者

加瀬 保子（KASE, Yasuko）

琉球大学・国際地域創造学部・准教授

研究者番号：70724722

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究においては、アジア系アメリカ人作家による戦争表象をトラウマ理論を用いて分析することを試みた。特に、太平洋戦争とベトナム戦争に焦点を当て分析を行ったが、その上でトラウマ理論を単に用いるのではなく、政治的、歴史的背景も考慮に入れながら、改訂しつつ用いるようにした。最近出版されたトラウマ関連の資料を読み進めるうちに、1990年代前半に作られたトラウマ理論に対して当研究と同様に改訂の必要性を説く批評家が多く出て来ていることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、単に既存のトラウマ理論をアジア系アメリカ文学に当てはめるのではなく、トラウマ理論の作られた政治的、歴史的背景を考慮に入れ、また、ディスアビリティスタディや脳科学などの分野の知識を取り入れつつ、アジア系アメリカ文学と対話させ分析を試みたところにある。アジア系アメリカ人作家は、そのトランスナショナルな視点から、国家的な戦争記憶とは違った歴史的トラウマの描き方を行っている。本研究では特にベトナム戦争と太平洋戦争という政治的議論が未だ尽きない歴史的トラウマについて描いた作品に注目した点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this project, I use trauma theories to analyze Asian American writing on wars. Specifically, I conducted my research on World War II and the Vietnam War by politicizing and contextualizing the traditional trauma theory, which was created in the early 1990s by Cathy Caruth and her followers. By reading recently published works in the field of trauma studies, I have discovered various types of criticism and alternative methods presented by many scholars, who attempt to revitalize the field.

研究分野：アジア系アメリカ文学 ト라우マ研究 ディスアビリティ研究

キーワード：トラウマ理論の改訂 脳科学と人文系トラウマ研究のブリッジ マイノリティによる歴史的トラウマ描写分析

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

アジア系アメリカ文学とトラウマ理論は一見相入れない研究分野に思えるかもしれない。1990年代前半、Cathy Caruth などによって作られた主流のトラウマセオリーは、主にトラウマ犠牲者の崩壊した主体と過去への固着、犠牲者の断片的なトラウマについての語りを研究対象にするため、アジア系をはじめとして、マイノリティの目指す権利獲得のための力強い主体確立という方向性と大きな違いがある。しかしながら、主体が前提になって representation するという一般的な政治的過程を逆転させ、文学によるトラウマ表象がどのように主体を再定義してきたかという政治的なプロセスを考えられはしないだろうかという疑問から当研究は出発した。

2. 研究の目的

アジア地域とアメリカを巻き込んだ戦争のトラウマ—特に太平洋戦争とベトナム戦争—について、アジア系アメリカ人作家がアメリカのメインストリームといかに異なる表象を試みているか考察する。医学・精神医学・人文学分野のトラウマ研究やディスアビリティ研究、脱植民地主義研究、文学ジャンル研究などの分野を対話させて、アジア系アメリカ文学における戦争表象を分析し、国家中心の戦争記憶と異なる記憶の生成について考察する。

3. 研究の方法

(1) トラウマ理論の系譜について調査し、人種・エスニシティに注目しながら分析し、必要であるなら脱構築する。

(2) 最近のトラウマ理論の動向を調査する。

(3) 医学分野のトラウマ研究、特に Joseph LeDoux の情動研究の文献を精読し、これまでトラウマ理論の主流となってきた Cathy Caruth や Bessel A. van der Kolk らが主張してきたトラウマ理論を改訂する必要があるか見極める。

(4) ディスアビリティ研究とトラウマ理論の接点また相反点を見極める。

(5) 様々なエスニックグループに属するアジア系アメリカ人作家による戦争トラウマに関する作品を社会的・歴史的背景、各作家の選んだジャンルの特徴を考慮に入れながら分析する。

4. 研究成果

(1) トラウマ理論をアジア系アメリカ人作家の戦争表象分析に用いるにあたって、トラウマ理論と人種との関係を明らかにしたいと考えた。というのも、アメリカにおけるトラウマ研究の多くがホロコーストについて焦点を当てており、ユダヤ人に対する差別が根深くこの歴史的トラウマに関連しているからだ。また、トラウマ研究では、Sigmund Freud の精神分析理論がよく取り上げられるが、Freud 自身がユダヤ人である。そこで、Roger Luckhurst によるトラウマ理論の系譜研究や Sander L. Gilman の人種と病理学についての研究を精読することで、トラウマ理論と人種との関係について調査した。

Luckhurst によると近代西洋におけるトラウマ研究と白人男性という西洋社会でのスタンダードモデルからはみ出る「他者」(racial, sexual, and gendered others)を病的なものともみなすこととは深い関わりがある。19世紀、鉄道事故被害者の治療から、今のトラウマに当たる「レイルウェイ・スパイン」という症状についての分析が試みられた。一見したところ怪我など身体的になんのダメージもないように思われるのに、心理的ショック症状を見せる被害者がいたことから、様々な理論が生まれた。体の内部へのダメージとショック症状の関連を説くものから、心理的ショック症状のみ独立させて考察するべきであるとするものもあった。19世紀後半もっとも権威のあった神経科医の一人 Jean-Martin Charcot は、Hermann Oppenheim が唱えた“neurosis”という症状を理論化し、トラウマ研究を新しい方向に導いたが、ヒステリーなどの精神疾患を引き起こす因子は遺伝によって身体に備わっていると理論づけた。Charcot は当時流行していた“degeneration”という概念—進化に逆行して「原始的状態」に退行すること—に基づいて、「正常」から「逸脱した」患者の症状を評価し、患者の家族間で「異常」症状が広がっているか調査した。

Gilman によれば、19世紀後半の“degeneration”という概念は「原始的な」他者のセクシュアリティ、すなわち人種的他者や性的倒錯行為（マスターベーション、ホモセクシュアリティ、不特定多数との乱行行為）と関連づけられて、「病」として扱われていた。Charcot は特にユダヤ人の「他者性」に興味をもち、ユダヤ人は近親交配が多く精神疾患に陥りやすい脆弱な神経系を持っていると考えていた。Charcot のこの人種的偏見は、彼の研究の Freud への影響を考えた時、大変興味深い。Freud 自身がユダヤ系であり、医師であるからだ。Gilman によれば、19世紀後半、また20世紀初頭の「人種的他者」を病理化する風潮は Freud にも大きく影響を与えた。Gilman は Freud が“degeneration”という概念をなんとか克服するために精神分析という領域を発達させたと述べているが、結局 Freud はこの概念を捨てることはできなかった。

このように、19世紀後半、20世紀前半の西洋社会での知的枠組みの限界の中からトラウマ理

論は発生し、当時の西洋社会の人種的偏見もトラウマの概念形成に深く影響を及ぼしていることがわかった。この系譜の研究については“*The Other of Western Modernity: Diaspora, Trauma, and the Impossible Autobiography in Monique Truong’s The Book of Salt*”においてまとめた。

(2) 最近の人文系のトラウマ研究は、Cathy Caruth らによって、1990年代前半、Yale大学の研究者たちを中心に形作られた主流派のトラウマ研究を引き継ぐ流れ（Caruthのトラウマについての説明については③を参照のこと。）と、Caruthらのトラウマ研究の盲点や弱点を指摘し、改訂していく研究の流れに分かれる。Caruthの貢献は偉大であり、敬意を払うべきものであるが、改訂の余地があるとの考えから、本研究では批判する立場の研究を主に精読した。一番早い時期のCaruthへの批判はRuth Leysによるものだ。Leysの批判の中で今若手研究者の中で注目されているのは以下の指摘である。Caruthは彼女の代表的な書籍となった*Unclaimed Experience*のイントロダクション中で、Freudが*Beyond Pleasure Principle*において引用したTassoの*Gerusalemme Liberata*というエピック・ポエムについて触れ、サヴァイヴァーの意思を超えて、トラウマというのは思いもよらず繰り返してしまうものだと述べている。（Tassoの作品のなかで、Tancredという武人は、彼の最愛の人Clorindaを敵と思い込み、誤って殺してしまい、嘆き悲しむ。その後、彼は魔法の森に迷い込み、そこで一本の高い木を切りつける。すると、それが実はClorindaの魂が宿ったものであったため、Tancredは思いもよらず繰り返し愛する人を傷つけてしまうことになった。）LeysはCaruthが切りつけた側のTancredをトラウマの犠牲者としていることを問題視している。この点を受け、Alan Gibbsはトラウマ研究において、犠牲者・加害者の二項対立を常に作り上げることの問題点を指摘している。（また、Caruth自身は最新版の*Unclaimed Experience*の中でTassoの作品を分析し、反論を試みている。）

その他のCaruthに対する批判としては、Stef CrapsやAnanya Jahanara Kabirらによる、Caruthの西洋中心主義に対しての批判的指摘がある。またMichelle Balaevは主流の心理学的トラウマ分析モデルだけでなく、他のモデルも用いるべきとし、具体的な地域的、社会的コンテクストを考慮しつつ、トラウマ分析をすべきであると主張している。このように主流のトラウマ理論を改訂する動きが出てきている。本研究ではアジア系アメリカ人作家というマイノリティの作品分析を行うこともあり、主流理論の貢献を認めつつも、新しい批評の方向性に加わっている。特にAlan Gibbsのperpetrator traumaについての指摘は戦争トラウマを考える上、大變的を得ており、ベトナム戦争や太平洋戦争のトラウマを分析するのに大いに参考となると考えた。

(3) Joseph LeDouxの情動研究についてはE. Ann Kaplanによって、Bessel A. van der Kolkの理論にかわるものとして紹介がされたため、興味を持った。しかし、実際LeDouxの著作*Anxious*を読んでも、Kaplanが引用しながら用いている他の研究者によるLeDouxの扁桃体研究の説明において、視床-感覚性皮質-扁桃体のサーキットが意識された記憶を生み出しているかのように書かれているが、扁桃体は恐怖というfeeling（意識された形での感情）をそこから「直接に」作り出していないとLeDoux自身は述べているということが分かった。（Kaplanの著作⑩のpp.37-38とLeDouxの著作⑭のp.212を参照のこと。）また、van der KolkとOnno van der Hartの“The Intrusive Past: The Flexibility of Memory and the Engraving of Trauma”という論文の中でimplicitな記憶がexplicitな記憶に変換できるかのように記述しているが、LeDouxは*The Emotional Brain*においてimplicit memoryがexplicit memoryに変換されるようなことはないかと述べている。人文系のトラウマセオリーの中で脳科学の知識を活用するには慎重な検証が必要であると感じた。また、脳科学の研究の中では一般に“emotion”は意識にのぼる以前の脳の動きを表すことを示すのに対して、“feeling”は意識にのぼった状態を示すように書かれている場合が多い。しかし、専門外の者が混同することも多く、LeDouxは混乱を避けるため、*Anxious*の中ではより厳密に言葉を選ぶ必要性を説いている。脳科学の分野の研究を人文科学の分野に活用するためには、このように用語一つをとっても慎重に意味を吟味して扱うべきであり、それを怠ると間違った理論を作り上げてしまうと思った。このことについては、“Neurobiology and Trauma Theory”という論文でまとめ学会発表した。また脳科学と人文系のトラウマセオリーについては2019年度から開始している“Neuroscience and Trauma Theories in the Humanities”(基盤C # 19K00421)において研究を継続して考えを深めていく予定だ。

(4) ディスアビリティ研究とトラウマ理論の関係は複雑であることが分かった。ディスアビリティ研究は他のマイノリティ研究と同様、障害者の権利獲得運動から起こったものであり、障害のある状態を医学的見地から「正常な」状態に「治療すべき」個人的な悲劇であるという考えを強く否定してきた。このような「医学モデル」ではなく、障害者を疎外するような社会環境やableismに問題があるとする「社会モデル」を用いる。また、ディスアビリティ研究の主流は、生来から持つ障害や一見して認識できる形の障害にどちらかというところを当ててきた。これに対して、トラウマ理論においては、トラウマをめぐる記憶と語り（の不/可能性）、犠牲者のトラウマ経験におけるそれ以前の主体の崩壊に中心をおいて理論構築されてきた。この二つの研究分野の接点としては、James Bergerが論じているように、トラウマ的な出来事が障害を生み出す時に起こる主体の身体的、精神的な大きな変化に注目することが重要であろう。このことは戦争トラウマを論じる上でも重要かと思われる。戦場での負傷などから障害をもつようになるケースも多く、それらがトラウマ的な出来事と重なる場合もあるからである。ディ

スアビリティ研究とトラウマ理論の関係については cognitive disability などについての研究なども含め、今年度から開始している科学研究においてより深く考えて行きたい。

(5) 以上のように、様々な角度からトラウマ研究そのものを見直し、アジア系アメリカ人作家による戦争トラウマの表象分析を行った。特に本研究では、戦争の国家的記憶についての様々な論議が続けられているベトナム戦争と太平洋戦争に注目した。

ベトナム戦争は白人男性作家による作品が主流を占めているが、ベトナム難民からの視点で書かれているものも数多く出版されてきた。戦争直後は白人編集者や翻訳者が、ベトナム系難民の自叙伝出版に関わり、彼らの視点が大きく作品構成に影響を与えた。しかしながら、幼少の頃にアメリカに難民として入国し、英語をマスターすることができた Monique Truong や lê thi diem thúy は小説のジャンルを用いて作品を出版している。ベトナム系作家に対するアメリカのメインストリームの読者の期待はまず難民としての戦争体験といかにアメリカに「救われたか」という物語を提供することである。このことは、ベトナム難民が Jacques Derrida が著作 *Of Hospitality* でいうところの “the law of hospitality” に従って、ホスト国であるアメリカに対して、アメリカでの文化コードに従って、「適切に」発言し、行動する「ゲスト」であることを期待されるということである。本研究では、このような “the law of hospitality” とベトナム難民作家の戦争トラウマの記憶がどのように絡み合うか分析した。

また、ベトナム戦争はホロコーストとともにアメリカにおけるトラウマ研究を推進させるきっかけであったこともあり、(1) で述べた 19 世紀後半から 20 世紀初頭のトラウマ研究と人種の関係の分析とともに、ベトナム戦争とトラウマ研究の関係についても検証した。ベトナム戦争に参戦した軍人たちの陳情活動によって、彼らのトラウマ治療のため「トラウマ」という診断のカテゴリーが American Psychiatric Association の *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders (DSM) III* に 1980 年に正式に含まれることになった。Alan Gibbs は、「トラウマ」と診断されることで軍人の立場が perpetrators から victims に変換し、戦後彼らがもう一度アメリカ国内に受けられるための装置としての働いたのだと指摘している。そうすることでベトナム戦争での彼らの体験はどのように記憶されてきたか、ベトナム難民作家はアメリカのメインストリームの戦争記憶に対してどのような alternative memory を示そうとしてきたか、トラウマ研究の背景を考慮に入れながら、Truong と lê の文学的戦略をそれぞれ論じた。

太平洋戦争については、未だ政治的論争の絶えない歴史的トラウマである従軍慰安婦問題 (Chang-rae Lee の *A Gesture Life*)、原爆投下 (Juliet Kono の *Anshū: Dark Sorrow*)、そして南京大虐殺 (Wing Tek Lum の *The Nanjing Massacre: Poems*) を扱った作品に注目して分析した。アジア系アメリカ人作家によるこれらの歴史的トラウマについての作品は、国家的記憶が用いる英雄/加害者、加害者/被害者という二項対立を崩して、その中間に置かれた曖昧な人物や状況を描いている。Lee の作品については、情動とトラウマの記憶の関わりに注目し、Kono の日系アメリカ人被爆者についての作品については、ディスアビリティ研究とトラウマ研究、そして Kono が選んだ教養小説についてのジャンル研究などを組み合わせて分析を行った。Lum の南京大虐殺についての詩集については、ドキュメンタリー的な手法が生み出す情動に注目して分析を行った。

<引用文献> (アルファベット順)

- ① Balaev, Michelle. *The Nature of Trauma in American Novels*. Evanston: Northwestern University Press, 2012.
- ② Berger, James. “Trauma without Disability, Disability without Trauma: A Disciplinary Divide.” *Journal of Advanced Composition* 24, no. 3 (January 2004) 563-82.
- ③ Caruth, Cathy. Introduction to Part I of *Trauma: Explorations in Memory*, 3–12. Edited by Cathy Caruth. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1995.
- ④ - - . *Unclaimed Experience: Trauma, Narrative, and History*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2016.
- ⑤ Craps, Stef. “Beyond Eurocentrism: Trauma Theory in the Global Age.” In *The Future of Trauma Theory: Contemporary Literary and Cultural Criticism*, edited by Gert Buelens, Sam Durrant, and Robert Eaglestone, 45–61. London: Routledge, 2014.
- ⑥ Derrida, Jacques. *Of Hospitality*. Translated by Rachel Bowlby. Stanford: Stanford University Press, 2000.
- ⑦ Gibbs, Alan. *Contemporary American Trauma Narratives*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2014.

- ⑧ Gilman, Sander L. *Difference and Pathology: Stereotypes of Sexuality, Race, and Madness*. Ithaca: Cornell University Press, 1985.
- ⑨ Kabir, Ananya Jahanara. "Affect, Body, Place: Trauma Theory in the World." In *The Future of Trauma Theory: Contemporary Literary and Cultural Criticism*, edited by Gert Buelens, Sam Durrant, and Robert Eaglestone, 64–75. London: Routledge, 2014.
- ⑩ Kaplan, E. Ann. *Trauma Culture: The Politics of Terror and Loss in Media and Literature*. New Brunswick: Rutgers University Press, 2005.
- ⑪ Kono, Juliet S. *Anshū: Dark Sorrow*. Honolulu: Bamboo Ridge, 2010.
- ⑫ Lê, thi diem thúy. *The Gangster We Are All Looking For*. New York: Anchor Book, 2004.
- ⑬ LeDoux, Joseph. *The Emotional Brain: The Mysterious Underpinnings of Emotional Life*. New York: Simon & Schuster, 1996.
- ⑭ ---. *Anxious: Using the Brain to Understand and Treat Fear and Anxiety*. New York: Viking, 2015.
- ⑮ Lee, Chang-rae. *A Gesture Life*. New York: Riverhead, 1999.
- ⑯ Leys, Ruth. *Trauma: A Genealogy*. Chicago: University of Chicago Press, 2000.
- ⑰ Luckhurst, Roger. *The Trauma Question*. London: Routledge, 2008.
- ⑱ Lum, Wing Tek. *The Nanjing Massacre: Poems*. Honolulu: Bamboo Ridge, 2012.
- ⑲ Truong, Monique. *The Book of Salt*. New York: Houghton Mifflin, 2003.
- ⑳ Truong, Monique T.D. "Vietnamese American Literature." In *An Interethnic Companion to Asian American Literature*, edited by King-Kok Cheung, 219–46. New York: Cambridge University Press, 1997.
- ㉑ van der Kolk, Bessel A. and Onno van der Hart, "The Intrusive Past: The Flexibility of Memory and the Engraving of Trauma." In *Trauma: Explorations in Memory*, edited by Cathy Caruth, 158–82. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1995.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

- ① Kase, Yasuko. "Guests of Empire, Ghosts of Dispossession: Traumatic Loss and the Subject without a Proper Name in *The Gangster We Are All Looking For*," *The Journal of Literature and Trauma Studies*. (2019年秋出版予定。印刷中にてページナンバー未定。) (査読有)
- ② Kase, Yasuko. "Diasporic War Memory in Juliet S. Kono's *Anshū: Dark Sorrow*." *The Japanese Journal of American Studies*, vol. 27, 2016, pp. 235-55. (査読有)
- ③ Kase, Yasuko. "Ethics of Remembering: Reading Hawai'i's Asian American Literary Texts on World War II in Japan." *Asian American Literature Association Journal*, vol. 20, 2014, pp.29-36. (査読無、依頼有)

〔学会発表〕（計 12 件）

- ① Kase, Yasuko. "Justice from Liminality: Documenting Atrocities in Wing Tek Lum's *The Nanjing Massacre: Poems*," *The Annual Convention of Modern Language Association*, 2019.
- ② Kase, Yasuko. "Neurobiology and Trauma Theory," *Annual Meeting of the American Comparative Literature Association*, University of California, 2018.

- ③ Kase, Yasuko. "Politics of Care and Racialized Medicine in *A Gesture Life* by Chang-rae Lee," Association for Asian American Studies Annual Convention, 2017.
- ④ Kase, Yasuko. "The Perfect Guest: Trauma, Kinship, and the Implicated Subject in *A Gesture Life* by Chang-rae Lee," The Annual Convention of Modern Language Association, 2017.
- ⑤ Kase, Yasuko. "The Perfect Guest: Trauma and Implicated Subject in *A Gesture Life* by Chang-rae Lee," Nihon America Gakkai, 2016.
- ⑥ Kase, Yasuko. "Are Hibakushas the Disabled?: The Genealogies of Hibakushas and the Disabled in Japan," Annual Meeting of the American Comparative Literature Association, 2016.
- ⑦ Kase, Yasuko. "Documenting Atrocities: Graphic Effects and Historical Trauma in *The Nanjing Massacre* by Wing Tek Lum," Hawaii International Conference and Arts and Humanities, 2016.
- ⑧ Kase, Yasuko. "Medical Gaze and Affect in *A Gesture Life* by Chang-rae Lee," *Kyusyu American Renaissance Kenkyu-kai Summer Seminar*, 2015.
- ⑨ Kase, Yasuko. "Ethics of Remembering: Reading Hawai'i's Asian American Literary Texts on World War II in Japan." *Asian American Literature Association 25th Anniversary International Forum*, 2014.
- ⑩ Kase, Yasuko. "Bridging Theories of Trauma and Disability: War Trauma and the Asian Diaspora in *Odori* by Darcy Tamayose and *Anshū: Dark Sorrow* by Juliet S. Kono" *The 48th Annual Meeting of the Japanese Association for American Studies*, 2014.
- ⑪ Kase, Yasuko. "Bridging Disability Studies and Trauma Theory: "Hibakusha" and Its Metaphors in *Anshu: Dark Sorrow* by Juliet S. Kono" Asian American Literature Association Reikai, 2014.
- ⑫ Kase, Yasuko. "Revisiting Japanese American Internment After 9/11: Perry Miyake's 'Post-Bildungsroman,'" *Northeast MLA Convention*, 2014.

〔図書〕（計 1 件）

- ① Kase, Yasuko. "The Other of Western Modernity: Diaspora, Trauma, and the Impossible Autobiography in Monique Truong's *The Book of Salt*." In *The Politics of Traumatic Literature: Narrating Human Psyche and Memory*, edited by Önder Çakurtaş, Antolin C. Trinidad and Şahin Kiziltaş, pp.12-35. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2018. （査読有）